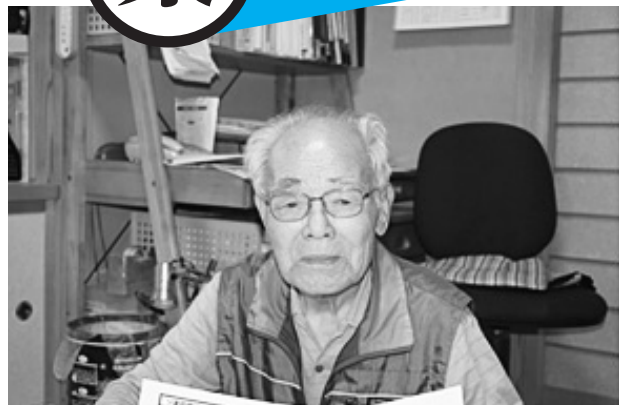


特集



シベリア抑留からみた戦争の実態

大野市 西太(にしふとし)さんの体験



シベリア抑留体験を語る

大野市在住の西太(にしふとし)さんは、シベリア抑留・北朝鮮抑留の体験者です。今回、西さんにお話しを聞く機会をいただきました。西さんは大正13年生まれの92歳、「自分の体験なんて若い人に話をしてもらく話是非常に貴重なものだと感じました。西さんは抑留から引き揚げ後、北陸電力に入社し、組合活動にも取り組まれており、労働組合の先輩でもあります。

戦争に行くまでの状況を教えてください。

1941年(昭和16年)、大阪の学校を卒業し神戸の川崎造船所(現・川崎重工業)に就職、潜水艦を作っていました。本籍は福井のままでしたが1944年(昭和19年)に神戸で居留地試験を受け、軍隊に入りました。試験の合格ラインは体格では5尺(約150cm)・16貫(約60kg)、視力や病気の有無も検査され甲乙丙でランク付けされました。甲乙は視力が問題ない病気もない。丙は病気があり体力がなく、兵役免除となります。しかし、戦争の最後の方では男であれば合格となりました。

軍隊では陸軍に所属、陸軍の中は歩兵、砲兵、騎兵、航空兵に分かれ、自分は航空兵に配属され飛行機の整備兵になりました。入って三か月はひたすら軍隊の基本動作や鉄砲の撃ち方などを訓練し、その後各隊へ配属となりました。

配属先は秘密で、第57飛行場大隊という部隊名のみ知らされました。配属先への移動は、部隊の下士官が来て引率し、連れて行ってくれました。博多から当時の朝鮮に向かい列車で満州を経由して中国へ向かいました。

配属先は、昔の中国という中支、揚子江や洞庭湖近くの飛行場でしました。ここでも軍の学校に行ったりして訓練をしました。

1944年(昭和19年)の終わりに、日本へ帰ると言われて満州に移動しました。満州の飛行場でも飛行機はなかったので仕事はなく、飛行場の裏山で穴掘りをさせられました。

終戦から抑留されるまではどのような状況でしたか。

1945年(昭和20年)の8月15日は満州の新立屯(しんりつとん)の飛行場にいました。当時の満蒙開拓団なども近くにいました。終戦に関しては情報も命令ありませんでした。

8月19日になると移動の命令が出ました。一人につき鉄砲の玉120発

と手りゅう弾2個を渡され汽車に乗り、20日には新民というところに移動しました。駅に着いたところでソ連兵が100人くらい来ましたが絶対に手を出してはならないとの命令があり、そのまま駅の広場で武装解除させられました。武器も食べ物も取り上げられ、部隊の600人と一緒にいた居留民とともにその場に1か月留め置かれました。

その後、奉天という場所に移動しました。奉天では関東軍の各部隊が集められていました。関東軍とは満州の防衛のための部隊で60万とも70万とも言われ、当時の精鋭部隊でしたが、終戦間際には、戦えるものは南方へ派遣されており、数合わせとして現地で徴兵された者も多く、装備も揃っていない状況でした。

奉天からシベリアに連れていかれましたが、ソ連兵からは日本に帰すための移動と説明されました。朝鮮を通るとアメリカ軍がいて通してくれないため、ウラジオストクを通って帰るとの説明でした。結局、ソ連兵に騙されたわけで、最初から労働力の確保が目的でした。満州の資材(炭鉱からの物資)の運搬やシベリア開拓のための労働力がほしかったの

だと思います。つまり、ソ連が戦争のために失った国力を回復するために最初からシベリアへ連れて行くつもりでした。

奉天で10000人の労働大隊を編成され輸送のための貨車に乗せられました。30トン貨車（一般的に想像するサイズの貨車）1台に50人が乗せられ、ダイヤなんてなかったので止まればかりで時間がかかりました。1か月かけて黒河というところに移動、そこで河を渡りブラゴエチェンスクに移動しシベリア鉄道に乗り換えました。鉄道は時間不規則で、食事は飯盒でご飯を炊いて缶詰をおかずに食べました。トイレもない状態でした。

シベリア鉄道でバイカル湖近くを通ってアバカンというところに移動、そこから徒歩で100kmくらい移動し、トランスワールというところが収容所でした。

― 収容所での生活はどうでしたか。

収容所での仕事はひたすら森林伐採をしていました。ドラム缶くらいの太さの松を2人引きの鋸で切

り倒し、1mくらいの長さに切りそろえました。仕事にはノルマがありました。食料は黒パン（燕麦が原料のパン）を1日300g（食パンで2枚くらい）とコーリヤン（きび）のおかゆ、キャベツの切れ端2〜3枚が浮いた塩味のスープ（塩水）でした。ノルマが達成されると少し食料が増やされましたが、達成できない人から減らされた分が回されただけでした。寝る場所は平屋の丸太小屋でした。外はマナス30度から40度、室内には暖炉がありましたが暖炉の周辺のみ暖かい環境でした。

最初の冬（昭和20年から21年にかけて）は、栄養状態が悪く、シラミがいる住環境で発疹チフスが発生し、さらに寒さで凍傷になり手足を切断するなど影響して多くの死者が出ました。（抑留では60万人の抑留者の内6万人が死亡したと言われていますが、その6〜7割が昭和20年から21年にかけての冬に死亡しました。）

― シベリアだけでなく北朝鮮にも連れていかれたとのことでしたが？

昭和21年の春、仕事ができる人できない人をソ連の軍医がチェックしました。お尻の肉をつまみ、ひねることで肉付きをチェック、不合格とされた人は移動させられました。汽車に乗せられ各収容所を回り、ウラジオストクのナホトカから3000kmくらいの船で出発、清津の港から北朝鮮に入りました。北朝鮮では古茂山の収容所（日本の小野田セメントの工場と社宅群跡を収容所として利用）に入りました。収容所では常時2000人くらいが生活していました。仕事は特になく荷物の積み下ろしなどをしました。仕事をしていると現地の子どもに石を投げられたりしました。

古茂山収容所での食べ物は3食トウモロコシでしたが消化不良になりました。時間があるので皆でトウモロコシの皮をむきました。収容所には薬もなく医者も軍医のみ、次々に死んでいきました。そのため、死体の始末が仕事になっていきました。ソ連兵は死体を裸にして埋めるよう指示しました。死人に服はいらないということかと思いました。また病気の原因を調べるためか研究のためか、軍医は死体を解剖しました。最

初は埋める前に縫ったが、最後は仮縫いもしなくなったのでそのまま埋めました。タンカをつくって、収容所の近くの丘のような所に運び、穴を掘って入れました。土をかけて木片に番号を書いて置き、その辺の草をそなえました。最初は涙も出ましたが、数が多すぎて次第に涙も出なくなりました。土饅頭がいくつも並んでいました。番号はソ連兵が管理していましたが、いまだに生死不明の人がいます。ソ連兵が名前を間違えて記録していることがありました。当時の情報があつても名前の記録が間違えているため突合できず、発表できないと聞きました。

― 最後に、後輩にメッセージをお願いします。

戦争は誰も得することがありません。いまだに遺体が不明で墓も立てられない人がいます。死亡したことが確認できない人がいます。政府から広報もされていない人がいます。70年がたつても終わっていません。戦争は絶対にはいけません。

（取材）大野市職員労働組合 野田博幸